

令和7年度 第2回白馬高等学校学校運営協議会 議事録(概要)

1 日 時 令和7年(2025年)7月5日(土) 9時30分～11時30分

2 場 所 白馬村保健福祉ふれあいセンター学習室

3 出席者 委員14名 以下敬称略

- ・武田彰代(大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長)
- ・太田伸子(白馬村議会議長)
- ・草本朋子(白馬インターナショナルスクール理事長)
- ・笹川陽子(めぞん・ど・ささがわ)
- ・松澤忠明(PTA会長)
- ・白戸洋(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授)
- ・丸山俊郎(白馬村長)
- ・中村義明(小谷村長)
- ・北村幸治(白馬山麓事務組合事務局長)
- ・石川順三(白馬高等学校長)

欠席委員

- ・相沢さつき(同窓会副会長)
- ・柴田友造(小谷村議会副議長)
- ・中村和彦(白馬村立白馬中学校)
- ・小林かおる(小谷村立中学校長)

その他の出席者

- ・原多恵子(高校教育課主幹指導主事)
- ・宮嶋直美(高校教育課主任指導主事)
- ・白馬村副村長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係係長、主任、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉(藤森要白馬高等学校教頭)

(2) 長野県教育委員会挨拶(原多恵子主幹指導主事)

○今年度も県内外から多くの新入生を迎え、すでに次年度に向けた生徒募集が始まっている。6月21、22日に東京で開催された全国募集説明会では、白馬高校のブースに多くの中学生、保護者の方が訪れたと聞いている。オンライン説明会や8月にも対面での募集が行われるとのこと。継続的な取り組みに心より感謝している。

○今後は白馬高校の魅力を広く発信し、普通科を含め、県内外問わず、多くの生徒が白馬の地での学びを求めて入学してくれるように、地域の方や学校と共に引き続き魅力ある学校づくりに取り組んでいきたいと考えている。

○本日は国際観光科の1期生、3期生に現在の活躍の様子をお話いただき、意見交換の時間も設けている。OBの方のアイデアを聞かせていただき、今後の活動に生かしていくことは、意義深いことだと考えている。白馬高校のさらなる発展のため、活発な議論がされることを期待している。

(3) 学校長より挨拶(石川順三白馬高等学校長)

○入学式を終え3ヵ月、165名が在籍。生徒は素直で明るく、元気にやっている。昨日から第76回しろま祭が行われているが、今回のテーマ「恵比須顔」にあるように、皆、笑顔で対応してくれているので見ていて気持ちがいい。新入生の様子を中心に、後程、報告していく。

(4) 報告事項

<白戸会長>

○今回は卒業生による談話会が予定されている。立ち上げ当初から、「卒業生が地域を支えてくれる」ということを期待しながら、白馬・小谷の地域の方は応援をしてきたと思う。そういう意味では、意義深い内容になると思う。

①学校より報告事項

<石川校長>

○今年度の入学生についての報告をしていく。

○資料P 6、新入生に向けたアンケートの分析結果について。昨年度と同様に行ったアンケートは、極力同じ質問項目にして実施。

○P 8「中学校の頃の白馬高校の印象」について。良い印象としては、「友達がいて良い」、「仲が良い」、「先生がフレンドリーである」など。スキー部についても書いてあり、中学生の頃にはそうした印象があった様子。悪い印象としては、校舎についての意見が多く見られた。偏差値についても昨年度同様見られた。

○「入学した理由」は、普通科と国際観光科に分けて多く見られたキーワードを図にしてある。国際観光科については、「観光科」が魅力としてあがっていた。「白馬村」という地域の魅力をあげる生徒も見られた。普通科の子たちにとっては「通える」高校。身近な高校ということが選択の理由になっていると思う。インターアクト、山岳、野外活動、クロスカントリー、スキーなどのキーワードも見られた。

○「体験入学、学校説明会、授業公開のどれかに参加したか」に関して、昨年度に比べると若干少ない印象はあるが、7割程度の生徒が「参加した」と回答。今年度の体験入学は7月26日（土）に実施予定。参加者は昨年に比べ、若干少ないが、6月上旬に白馬中の3年生が訪問し、授業の様子などを見てもらったこともあり、白馬中からの参加予定者が激減していると予想される。体験入学一本でアナウンスするのではなく、その都度その都度、地元の方には訴えていく必要があると考えている。公開授業も設定し、白馬中・小谷中、その他の地区の子にも門戸を広げ、7月の体験入学に来られない生徒にも対応していきたい。

○P 9「国際観光科を選んだ理由」としては、「観光」、「英語学習」、「語学力」に魅力を感じていることが分かる。「留学」という言葉をあげている生徒も見られ、実際に今年度末の短期語学研修に興味を寄せる生徒も相当数いると聞いている。売りの一つになっていることが分かる。高校生ホテルのことに触れる生徒もいたように思う。「普通科を選んだ理由」に関しては、どちらかというと、「いろいろな勉強をしたい」という生徒が多いように思われる。

○「今の学校生活に満足しているか」の質問に対して、昨年度に比べて「やや不満」と答えた生徒（国際観光科）は20%程度。内訳は「いじめのようなものが何度も起きている」や「授業がおもしろくない」など。人間関係について訴える生徒が見られる。実際に国際観光科は定員40人入学、さらに寮生も多い状況（パルハウスには64名、下宿が8名）。寮は3人部屋となっており、その中で人間関係がぎくしゃくしてしまった、という話も寄せられている。もちろん和解するケースもあるが、いまだにくすぶった関係にある寮生もあり、そうした生徒がコメントを寄せていると考えられる。

○「高校でやりたいこと」としてあがったのは、「マウンテンバイク」、「バーベキュー」、「留学」、「アルペンスキー」、「北アルプス」など。普通科では、「スキーモ」に魅力を感じたり、「山岳」などの声もあがったりした。

○「困っていること」について。国際観光科、普通科いずれも、校舎の使い勝手に関するところと勉強に対する不安や不満があがっていた。学習に対しては、おおむね7割以上の生徒が授業に「満足」「やや満足」と回答しているため、ところどころの不安等については、今後話し合いながら解消できればと考えている。

○P10「白馬中学・小谷中学卒業した生徒のうち、白馬高校がどんな高校だったら他校に進学した生徒が本校を選んだか」については、「評判が良ければもっと白馬高校に進学したのでは」という厳しい意見もあった。また「偏差値」についての記述も。「白馬高校はどんな学校であってほしいか」という問いに対しては、「周りから良い印象を持たれる学校」や「生徒に寄りそえる学校であってほしい」、「スキーヤーに理解のある学校」などがあがり、これらは日々学校としても努力しているところ

である。

○白馬中・小谷中出身者の「入学者（普通科・国際観光科）推移」について。今年は白馬中から普通科に 17 名、国際観光科においても 11 名が入学している。小谷中からも合わせて 5 名。過去に比べても多く、白馬中、小谷中の校長先生からも「白馬高校の魅力が年々高まりを見せている」という心強い声をいただいている。来年度以降も本校に入学する生徒が増えるよう、環境づくりをしていきたい。

②白馬山麓事務組合より

<北村局長>

○全国募集に関して、今年度の 6 月末までの状況を報告していく。

○5 月 21、22 日に、県外生の出身中学校（主に関西地区）への訪問を実施。入寮している生徒の担任の先生と話すなど、よい機会となった。全国募集の説明会、オンライン説明会は前年度と比較し若干減少傾向。開催日程の変更やスタンプラリーなどの企画数が減ったなど、さまざまな要因が考えられる。7 月以降も継続して募集活動を行う。

○白馬高校のパンフレットに大きな変更はないが、最終ページに国際観光科の卒業生の声を掲載。

○白馬高校へのサポートについて。パンフレット「住まいとサポート」には、寮のことや公営塾について記載。パルハウスの女子寮、男子寮の月額料金が 55000 から 60000 円へと変更予定。これは物価、光熱費、人件費などの上昇によるもの。令和 8 年 4 月から 6 万円に改定したいと考えている。保護者への説明はこれから行っていく。

<丸山委員>

○パンフレットのデザインは、どこかに外注したのか。全体的に色味が暗いイメージがする。こういうものは、だいたい表紙で決まるところもあるので、できれば明るめの方がよい気がする。

(5) 国際観光科 1 期生、3 期生による談話会 及び (6) 意見交換

<卒業生 A>

○長野市出身、2017 年に国際観光科 1 期生として入学。卒業後は信州大学理学部、大学院まで進学し、計 6 年間研究をしてきた。研究内容は、白馬、大町、松本などの北アルプスの成り立ちについて。今年の春から建築技術研究所という土木系の設計に携わる会社に就職。

<卒業生 B>

○長野市出身。父親の仕事の関係で 4 歳からアメリカマサチューセッツ州のボストンで生活。8 歳のときに帰国。英語を生かせると思い、白馬高校に入学。在学中にはボランティア活動に参加したり、さらなる英語力を身につけたり、白馬の魅力を発信したりした。卒業後は英語科へ進学。現在は、白馬村にあるコートヤード・バイ・マリオット白馬に勤務。

<卒業生 C>

○小さい時から八方でスキーをしていて、どうしてもスキーがしたいと思い、白馬高校に入学。在学中はアルペン部に所属。大学に進学したかったので、先生方に助けてもらいながら、受験勉強に励んだ。大学では基本的には理系の勉強をしながら、基礎スキー部に所属。「スキー部をどうすれば大きくできるのか」、「多くの人に楽しんでもらえるためにはどうすればいいのか」などを考えながら日々生活。大学 3 年生から全国大会出場、全日本で決勝に行くこともできた。今後は、デモンストレーターというスキーの基盤を考えていく立場から、もっともっとスキーのことを考えていければと思っている。

<浅井先生>

○3 人の在学中の印象について。卒業生 Aさんは、国際観光科ができたばかりであれこれ企画を考えていく中で、積極的に手を挙げてチャレンジしてくれる生徒だった。印象に残っているのは、真冬に雪が降る中、テントを張って寝ていたこと。「冬のキャンプの練習です」と…。国際観光科を切り開いていった人物。卒業生 Bさんについて。国際観光科初期のころ、「英語」に惹かれてくる子が多い中で、Bさんは観光にも興味がある様子が見られた。ホテル実習で生き生きと活躍していた。ボランティアもすごくやってくれていた。観光と英語、ボランティアという白馬高校の特徴的なものに関して興味をもって活動をしていた印象がある。卒業生 Cさんと言えば、白馬高校のもう一つの魅力であるスキー。スキーに興味があって白馬高校に進学し、在学中も一生懸命技術を磨き、取り組んでいた。その後は、デモンストレーターとしても活躍。

< 草本委員 >

○BさんとCさんは白馬に勤めている、ということだが、就職活動をしているときに白馬だけで探していたのか、あるいは他のエリアも候補に入っていたのか。どれぐらいの卒業生が白馬で就職を考えたのか、白馬での就職が簡単なのか、難しいのかを教えてください。

< 卒業生 B >

○白馬高校で学んだこと、知識や英語力がどれだけ活かせるかを重視して選んだ。村内で多くのホテルが建設され、ホテル業界での選択肢は多くあった。その中でもマリオットを選んだのは、多くの外国人を迎えていることなどが理由となった。

< 卒業生 C >

○スキー人生の中で、基本的にはスキーができるような仕事がいいなと思っていた。大阪、東京、松本などで就職活動を行ったが、実際にスキーをするととなると基盤が必要だし、やはりスキーをしていく上でのベストは白馬だと思い、選択した。白馬東急ホテルはスキーに関して前向きで、理解もある。白馬村をもっといろんな人に知ってもらいながら、スキーも楽しめればと思っている。

< 丸山委員 >

○実際にどういった仕事内容なのか。高校で学んだことがどう活かしているか。逆に高校の時にこんなことを学ばせてほしかったということがあれば。

< 卒業生 A >

○具体的には地質調査をしている。特にダムや道路、河川の改修など、大規模な土木事業に関わる地質調査。地下がどうなっているか、工事によって井戸が枯れないか、など。高校での経験が活きていると感じるのは、地域の方とコミュニケーションを取るとき。調査をするときにコミュニケーションをとる機会が多いが、そういう際に、授業でインタビューした経験から臆せず話にのけるし、さらに話を膨らませることもでき、経験が活きているなど感じる。「もう少しこういうことを勉強したかったな」という点に関しては、英語、国語などの文系科目もちろん大切だが、もう少し数学、理科科目を当時、授業に取り入れてもらえれば、もっと理科に興味を持ってくれる人が増えたかなと思う。

< 卒業生 B >

○現在レストランに勤務。レストランというと、料理を出して下げる、というイメージがあるが、結構コミュニケーションやホスピタリティー、おもてなしをする場でもある。白馬村のおすすめの場所やホテルからの所要時間などを聞かれることもあるため、私が説明することもある。個人的にはオーバーツーリズムを心配している。京都にいた際にオーバーツーリズムがどのような影響を及ぼすかを間近で見ていたこともあり、防げるようにしていきたい。白馬はスポーツが注目されているが、私は白馬の魅力は「白馬村」にあると考えている。白馬の村民の生活と観光、うまくバランスをとっていければと思うが、当時、観光の授業だけでなく、村民の生活についても両方学べるとよかったかなと思う。そうすれば、「これからの白馬をどうするとよいか」の考えにもっとつながったと思う。

< 卒業生 C >

○東急ホテルのフロントでチェックイン・アウトの仕事をしている。白馬村の雰囲気は他にはないと思う。実際に白馬村に来てくれた方には、白馬独特の雰囲気に引き寄せられてくるお客さんが多く、「景色がきれい」や「白馬に来ると落ち着く」というリピーターも多い。そうした魅力をもっと伝えられるようにしている。国際観光科の授業では、外国人観光客に白馬のツアーをしたり、説明をしたり。白馬のことを調べながら、体験しながら、勉強することが多かった気がする。その中で「調べる」という作業は、自分から白馬に対して知識を広めなければならない部分があった。高校でしっかりと勉強できたからこそ、今、お客様に説明できているのではないかなと思う。パンフレットに書いてあることだけでなく、もっと深いところまで、例えば「実際はもっと道は険しい」や「秋の三段紅葉がきれい」など、説明できるようになっているので、経験が活かしていると思う。「もう少しこうしてほしかったな」ということについては、大学に入るためには受験対策が必要で、カリキュラム的に面白さは素晴らしいが、勉強の壁にぶつかってしまう感じを受けた。数学を夜10時ごろまで教えてもらっていたが、それくらいしないと大学にはなかなか行きづらいという実情がある。面白さを保ちながら、もっと実際に大学に行きやすいような、大学に入ってから将来を描けるようなことがあるともっとよかったと思う。

< 丸山委員 >

○大学に行くための壁は公営塾にも関わってくるので、今後検討していきたい。

<白戸会長>

○コミュニケーションを高校生活に身につけられて今に活かしているとのことのだが、具体的にどの授業でそうした力がついたのか。

<卒業生 A>

○学校内外 2 つの面から言えることがある。学校内で言うと、八方バスターミナルでインタビューをする経験が大きかった。高校生で自分から海外の人に話しかけるのは、相当勇気がいる。その中で度胸がついたかなと思う。また英語を聞き取って必要な情報を抜き取る、その力も大きかった。学校外で言うと、塩の道まつりや地区の清掃作業に積極的に参加する中で、自分より年齢の上の方とコミュニケーションをとったこと。質問をしたり、逆に自分から話しかけにいたり…。そういう主体的に行動する力が身に着いたかなと思う。

<卒業生 B>

○幼少期からアメリカにいたこともあり、気軽に会話はできていたように思う。学校内で特にコミュニケーション能力が伸びたと感じるのは、授業内のプレゼンテーション。グループ内で自分のパートを話したり、チームや大勢の前で発表したりする機会があったのがよかったと思う。

<卒業生 C>

○ボランティアや発表、インタビューなど、主体性をもって取り組まないといけない場が多かった。その中で、コミュニケーション力も身に着いたのだと思う。

<白戸会長>

○コミュニケーションは能力ではなく、誰でもできることだと言われている。大事なものは 2 つ。一つ目が場数。二つ目は、「話したいことがあるか」それから「話したい人があるか」。高校 3 年間で、白馬の人たちに対する愛着が生まれ、だからこそコミュニケーションがずっとできるようになったのだと思う。

<笹川委員>

○寮生活を送る中で当時困ったこと、「ああしたらもっと楽しかったらうな」などの振り返り、また寮生活を楽しむポイントなどあれば。

<卒業生 A>

○生まれも育ちも全員がばらばらの（私の代だと）13 人が集まり、「24 時間一緒に生活」となったとき、異なる価値観の中で一緒に生活するのが難しいと感じた。例えば、朝の点呼などをきちっと守ることが得意だったが、そうでない人もいる。他との違いに最初とまどい、大変だったなという印象がある。3 年間生活していれば何となく収束するものなのかなと思っていたので、3 年目には慣れていったように思う。「もう少しこうすればよかったな」という心残りとしては、3 年生のときに寮の運営に携わることができなくて、寮の内情が分かっていなかった。「1 年生が夜、遊びに出ていっている」や「点呼に出てこない」などの問題もあったが、もっとそうした内情に目を向けて、寮の治安、風紀を正しておけば、3 年生が上の学年になったとき、さらには数年後にも伝統として残せたのかなという後悔がある。

<卒業生 B>

○全く違う価値観の人たちと 24 時間過ごすのは、精神的にもストレスを抱えるものだと思う。まずは 1 年間ということで生活をして見たが、価値観がどうしても違うなという点で、自分の体のことも考え、下宿を選択。寮生が今の寮が楽しいと思うことが重要だと思う。みんなで出来るイベントがあると、日ごろの寮内のストレスも和らぐのではないかなと思う。

<卒業生 C>

○いろんなところから、いろんな人が、いろんな価値観をもって寮に来るので、寮生活が一番難しかった。高校になって急にいろんな人がいるところに入れられるので、実際ぼくらもどうすればいいかわからない部分があった。寮も出来立ての頃で、運営する方もどうすればいいのかわからなかったと思うが、なかなかそうした部分がかみ合わず、大変だった印象がある。価値観の違う中で、時間は守らなくてはならないし、ハウレンソウもしっかりしなくてはならないし。団体行動なので、やらなくてはならないことはあると思うが、それを強く押し付けてしまうと今度は寮がしんどくなり、学校に行きたくないとなってしまう…。当時はハウスマスターと相談して、最低限のルールだけはしっかり決めてやっていた。「刑務所みたい」と言っている子もいたので、そうした印象がなくなってくるといいと思う。食も課題のひとつ。普段家だと美味しいごはんが毎日出てくるが、「今日のごはん、

こんな感じか」となると、そこからストレスが生まれたりする。食へのストレスが寮への不満や不安にもつながる。

<笹川委員>

○数年前のしろま祭のときに、ガチャガチャで「寮の体験入寮券」を用意した。村内の人たちが寮に入る機会はまずないので、寮でごはんを食べてもらったり、部屋を見てもらったりしてもらった。地域の人たちにも様子を見てもらう機会を作りつつ、卒業生した寮生に思い出ツアーをしてもらいたいな、とも思った。

<石川校長>

○在学中の生徒の中にも「大学に行きたい」、「専門大学行きたい」などの子もいるが、漠然と家族の道をたどったから自分もその道を行こうかな、と進学を決めるケースも多い。君たちのような若者が、高校1年生、2年生に今やっている仕事について赤裸々に語ってくれるというのは、キャリア教育になるのではないかな、と思っている。もし高校1年生、2年生を目の前にしたら、どういったことを語るかをぜひ聞かせてほしい。

<卒業生A>

○5年前と3年前に、1年生向けにそうした話をしてほしいと頼まれ、実際行った。その時は大学生だったので学生のリアルというものを話した。次の機会があれば、高校生活と大学生活は全く違うけれど、「とても楽しいんだよ」ということをより強く話をしたいと思う。

<卒業生B>

○白馬村で学んだこと、特に英語力の必要性みたいなものを話すかなと思う。

<卒業生C>

○基本的に大事にしていることで、「軸をもっていたい」というのがある。「軸がある人」は目標に対して進んでいけるが、「軸がない人」は学校を辞めてしまったり、留年してしまったり。留年する人の大半はやりたいことがない人が多い感じがした。「軸」というと難しいが、好きなことを一つでも見つけられるように、そんな大切さを伝えたいと思う。

<石川校長>

○これから先は「仕事がどういう風に楽しいのか」、「自分の幸せ」という観点で高校生に伝えてもらえると、「こういう人になりたいな」という気持ちが生まれるかなとも思っている。そうしたキャリア教育ができるように、学校としても手配していきたい。

<武田委員>

○本来であれば社会に出て、「いろんな生き方をする人たちがいるんだな」と感じながら、折り合いをつけて生活していくが、そうしたことを高校時代で体験していること自体がすごいと思う。相手を受け入れるということが高校生の時にできていたんだな、と感じた。きっと知らないうちにできるようになったのだと思うが、「今、そういう経験をしているんだよ」と、現在の寮生に伝えてあげるといいのではないかな。子どもの質、保護者の質も変わってきている中で、荒波を乗り越えてきた卒業生の一言がきっと生徒に刺さると思う。「地域の人と対話をしてきたから仕事に役立っている」、「スキーにこだわりをもっていたから今がある」など。高校生活の何が大変だったかなども、ぜひ学校の方に、村の方にも伝えてほしい。貴重な体験をしていると思うので、高校生だけでなく、中学生や白馬村の人たちにも話をしてほしいと感じた。

<浅井先生>

○今までの経験、大学での経験を踏まえ、高校でこんなことしたらいいのでは…という提案はあるか。

<草本委員>

○それに関連して。Aさんのことは、1期生でいきなり国立大学に普通入試で合格し、「そんな子がいるんだ」と驚いたのを覚えているが、その後、そうした公立の大学に進む生徒が出てこない状況が続いている。それに対しても意見を聞かせてもらいたい。

<卒業生A>

○地質系の大学に進もうと決めたきっかけは高2の出前授業。白馬八方が古生代の地球の環境に似ているのではないかという研究をしている東京工業大学の先生の授業を聞いたこと。ローカルな話題でも、興味を持った分野を調べられる授業、自分の興味を深められる授業があると良いと思う。

<卒業生B>

○オーバーツーリズムに関して学べると良いと思う。また、村について学べるような場所ができるのと良いかと。例えば、資料館や博物館など。高校時代、白馬村のオリンピック前の歴史やスキー場ができる前の白馬村はどういうものだったのか、などを学びたいと思っていた。歴史や村のことを知りたいというお客さんが今後も増えるように思う。スポーツだけでなく、「白馬村を守ろう」とする観光客を増やせると、オーバーツーリズムを防ぐ協力者が出てくるのではないかと考えている。生徒たちにもオリンピック前の歴史を授業内で学んでほしい。昔の白馬村は今の白馬村とは違うと知る面白さがあると思う。

<卒業生 C>

○白馬村は実際に住みづらいところがある。他県から来たくても来られないのが現状。オーバーツーリズムの影響で外国人が増えたのも理由の一つ。高校に入ってくる子は、白馬に興味を持っている子や魅力を感じている子が多い。そうした生徒が帰ってきやすいように、住みやすい環境を整えるのがいいと思う。実際に同級生でも、白馬に戻りたくても「仕事がない」、「家がない」、「物価が高い」などの理由で戻れない友達もいる。

<中村（義）委員>

○同期生の中で「白馬高校のあの部分はよくなかった」と言っている人はいるのか。また、小谷村はどんな印象を持っているか。

<卒業生 A>

○高校の同期と話す機会はあまりないが、たまに会って話すのは寮のこと。1、2年目のときは寮のルールや風紀がしっかりしていたが、3年目にハウスマスターが交代し、生活の雰囲気、がらっと変わったと聞く。「1、2年目にしっかりしていたが故に3年目はだらっとしてしまったのではないか」という話が出る。小谷村に関しては、卒業してから白馬村よりも小谷村によく遊びに行っている。親戚が小谷に住んでいたり、コルチナのスキースクールで大学6年間働いていたりしたので。親しみのある村で、就職してからも長期休暇があれば遊びにいきたいと思っている。

<卒業生 B>

○京都の大学に進学したので、あまり同期と会話する機会はないが、年に1度は高校の友人と会う。授業は楽しかったが、クラスメイトとの人間関係がうまくいかなかったという話が出る。小谷村に関しては、正直、印象が薄い。授業内では白馬村のことに集中していたので、今後は小谷村のことも勉強していきたいと思う。

<卒業生 C>

○寮生活や高校生活がよかった、という友人が多い。高校時代には不満もあったと思うが、結果として白馬高校でよかった。いろいろな立場の人がいて、いろんなことに揉まれてきた経験があるし、皆それぞれの個性を生かした仕事についている。小谷村に関しての印象は、白馬より森が深い、白馬村のさらに一歩奥にあるというイメージ。住みやすいという話も聞くが、実際に小谷に行くとなると、「何をしにいくのか」がなかなか思い浮かばない。温泉や山菜、蕎麦などはあると思うが…。

<中村（義）委員>

○小谷村も身近にある村として、高校で「白馬村・小谷村」のことを学べるといいなと思う。

<白戸会長>

○今回卒業生に話をしてもらって、今後取り組むべき課題も見えてきたと思う。そうしたことも含めて何かご意見があれば。

<草本委員>

○授業内容などで経験したことが今に活かしているという話を聞いて嬉しかった。

○進学を考えるきっかけになったのが大学教授の出前授業だったという話を聞き、グローバル講演会の講師を選ぶ際「専門的な話はつまらないかもしれないから…」という軸で決めてしまったことを反省。専門性のある話に、全員ではないにしても、誰かひとりでも興味をもつ子がいるかもしれないので、勝手にこちらで判断してしまうのはよくないと思った。

<石川校長>

○学校全体としてしかける、探求ごとにあるいは生徒の興味につないでいく、そうしたコーディネートの力が学校に求められていると感じる。複数人で取り組む必要があるので、今後はそうした教員を増やしていきたいと考えている。

<白戸会長>

○協議会でも初期の頃は寮の話で心を痛めた部分もあった。今回の話を聞き、それがまた彼らにとっては学びになっていたのだと知れて、少しほっとした。さまざまなことをそういう観点でとらえることが大切。先に上がった新入生アンケートの中で「白馬中の子で固まっている」とあったが、逆にそれは「それだけ白馬中の子が来てくれている」ということ。そこから今後どうするかを考えていく。これからの方が白馬高校にとっては大事なこと。今回の（卒業生の）話を「いい話だった」とするのではなく、「これからにどう生かすか」を次回以降、協議できればと思う。

(7) その他

<原多恵子主幹指導主事>

○知らない人に話しかけることは心身ともに力が必要なことだと感じた。それを乗り越えてきた彼らの言葉はリアルであり、なるほどと思わせるものがあった。初々しい方たちと触れることで、新たにやる気が出てきた。「観光」というと地域のブランドという話についてしまうが、地質であったり、歴史であったり、いろいろな面から捉え、「白馬村をどう追及すればよいのか」のヒントももらえたと思う。生徒の成長の軌跡を感じることができ、話を聞くことができ、勉強になった。地域の方、保護者の方、OBの方と共に教育活動を支え、生徒ひとりひとりの未来のために歩んでいけたらと思う。

<白戸会長>

○飯田にリニアモーターカーが建設される際、若者が出て行ってしまうという危機感が地域全体にあった。当時、地域教育を進めたときに、実は地域に負担をかける部分が多くあった。地域にとって大変なことだったが、地域の方が地域に必要なことだと理解していた。一方で白馬高校は当初、地域の方が何としても白馬高校を守らなければならない、という考えがあったわけではなく、苦労したのを覚えている。今は移住者の質も変わってきている感じがする。以前は「都会的なものを求め、古いものはいやだ」という人が多かったが、今は、白馬や小谷など、もともとあった伝統に惹かれてくる移住者が増えてきている。そうした観点でいうと、白馬高校の教育が白馬村、小谷村で担う役割はとても大きいと思う。周りが高校と一緒に歩めるようになるのではないかと、そんな可能性を感じさせてもらった。

(8) 閉会の言葉

以上、第2回学校運営協議会は終了。